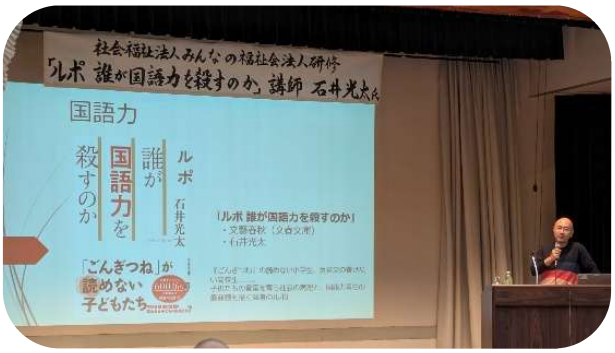
法人研修開催　ルポ「誰が国語力を殺すのか」より



毎年恒例の法人研修を全施設の職員対象で行いました。今年はノンフィクション作家の石井光太氏をお招きし「国語力」について講演いただきました。

「国語力」とは、年相応の語彙力をベースにして、五感で感じたことを言葉で考え、想像し、表現し伝える力であり、まさに「生きる力」となるものです。

石井氏は、少年の殺人事件や嬰児殺害事件の原因を解明しようと取材を重ねました。そして解ったことは「国語力のなさ」。最近の子どもたちがよく使う「きもい」「しね」など主語述語のない文章にならないことば。それが日常化していることで先を見通して考えることが出来ず、短絡的な殺人事件に至っているということです。一人が「殺せ」と言ったことで手にしたカッターナイフで切りつけ、次々に「殺せ」と言っては複数人で何十回も被害者を切りつけついに殺してしまった。始めは殺すつもりもなかったのに、言葉に踊らされ結果を想像することすらできず。思考力がないということは想像力もないということです。

私たちは、豊かでていねいな言葉のやりとりで生活することが困難な環境にある子どもには、ことさら配慮して保育をする責任があります。

なぜなら年齢に見合った国語力を育み「深い思考や物事の理解（解像度）」を上げ、理論立てて考えること、言葉を使って他人と折り合いをつけることは、その子の生きやすさにつながるからです。

わたしたちができること、国語力と保育理念

私たちは保育の中で言葉の出ない赤ちゃんの気持ちを言葉で代弁したり、泣けたり悔しくて表現しきれない子どもの気持ちを汲み取り言葉にして、その子と共感しています。こうした保育はまさに言葉の土台を作っているのです。現代社会ではスマホやタブレットで言葉のシャワーをたくさん浴びているように見える子どもたちですが、一方通行の受け身の言葉では国語力はつきません。私たちが行っている仲間と話し合って生活を作ったり気持ちの折り合いをつけたりするなど、生きた言葉のはぐくみが大事となるのです。



講演後、職員でグループワークをしました

●「仲間とともに感情が揺さぶられるような実体験」をすることで「他人に伝えたい！」気持ちがわいてくる

●人への信頼感が「わかってもらいたい」「自分のやりたいことを実現したい」意欲となり、国語力が総合的についてくる

まさに、今回のお話は、この法人の理念「豊かな自然体験と仲間とのかかわり」が今の子どもたちに重要だと確信するものでした。

「どうしたら大人になっても国語力を上げることができますか？」という参加者の質問に、講師からは「筋トレと同じで少し負荷をかけることです」というアドバイスでした。ネットでなく新聞をもっと読む、少し難しい書物に手を伸ばす等、私たち自身に課題を与えられた機会となりました。

２０２５年８月～２０２５年１２月意見・要望・苦情報告

■どんぐり保育園、くすのき保育園、まつのき保育園、小規模保育事業所みかんの家
意見・要望・苦情ともにありませんでした。

■児童発達支援事業所「ころころ」、「ころころ伊場」
意見・要望・苦情ともにありませんでした。